

## 留学生生活を振り返って

文学部 日本語日本文学科  
3年 小里麻由美

私が韓国に留学したいと思うようになったのは、大学一年のことでした。第二外国語の韓国語の授業が面白くて、韓国語で会話ができるようになりたいと思ったことが始まりです。そして実際に留学申請をして韓国に行く一週間前までは、バイトや手続きに追われ、あまり深く考えなかったのですが、荷造りをしながら段々と外国で一年間生活することは刺激的であると同時に、ある種、不安を孕んでいるということに気がつきました。それは日本の大学の友達に後れをとったらどうしよう、もし友達ができなかったら…といったものでした。

しかし、実際は、一緒に留学した安奈さんの家族に見送られ、明るく旅立つことができ、留学中は寄宿舎で共同生活だったため、留学生や韓国の学生ともすぐに意気投合して、そんな悩みがちっぽけなものだったと感じました。

そんななか、留学当初は、とにかく早く、韓国語で会話ができるようになりたいと思い、一生懸命勉強だけに励んでいたのですが、三月、四月、五月と月日が過ぎていくごとに、韓国の文化を実際に体験して、韓国での思い出を日本に持ち帰ることができればいいなと思えるようになりました。

それからというもの、友達の誘いで、華城や韓国の伝統的な村を観光しに行ったり、国立中央博物館や独立記念館に出掛けて韓国の歴史についても学んだり韓国でしかできない貴重な体験や旅行をしました。華城から見た韓国の町並みがどこまでも続いて夕日で輝いていた様子や、国立中央博物館でフランスから一時返還された儀軌を見るために人々が長蛇の列をつくって、自国の文化を熱心に子どもに教えている様子は忘れられません。

そうやって日々を暮らしていくうちに、留学生の友達から違う学科の友達を紹介してもらったりして、友達の輪も広がっていきました。私は、日本でも日本語日本文学科に在籍しているため、専門が違う人と話す機会はあまりなかったのですが、デザインや中国語・中国文学など日本語や日本文学以外のものを専門としている友達と話していると、すべてが新鮮で、なによりも自分とは違うことを知っていて、同じ事柄でも見方が違うというところに惹かれました。いろいろな人と話をしたり、いっしょに生活したりするなかで、人と違うということがいけないのではなく、自分の意見をはっきり相手に伝えなければならない場面があるということに気が付くことができました。私自身、少し成長できたように感じます。

とにかく、韓国に来て驚いたことは、学生たちが元気で外に目を向け、休みごとにいろ

いろいろな国を旅していたり、進んでたくさんボランティアを行ったり、休学して塾に通い、専門とは違う分野について学んでいるということでした。実際、友達に日本のどこに行ったことがあるとか、私の故郷の名前を聞いて、「この間の夏休みにいって来たよ!」などと言われるたびに、びっくりさせられました。確実に日本に住んでいる人より日本各県を渡り歩いている人が多いです。そんな話を聞き、なぜか私の方が日本の観光地を紹介されるたびに「もっと国内旅行しておけばよかったな。」と後悔しました。さらに、日本語を勉強したことがある人もない人も、一生懸命、知っている日本語で話しかけてくることにも驚き、感動しました。間違えることを恐れず日本語を話そうとするガッツと積極的にコミュニケーションをとろうとするその姿勢に、少し感化され、この留学中に韓国語だけでなく中国語の勉強も始めました。留学生間では、基本的に英語か韓国語で会話をしますが、ときどき習ったばかりのたどたどしい中国語で話したりすると、相手の顔がほころび、表情が明るくなります。その瞬間、英語でも、中国語でも、もちろん韓国語でも、人を喜ばせるために使いたいと思うようになりました。

この留学の中で私は、言葉の大切さ、人の温かさを学びました。友達や留学生仲間、先生方のおかげで人間的にもいい方向に変わることができました。体調を崩しがちで、色々な方にご迷惑・ご心配をおかけしましたが、それでも見捨てずに一緒にくださったことに感謝しています。そして、このような素敵な機会を与えてくださった、県立大学の先生方、そして奨学金などの件でお世話になった原山さん、教務入試課の皆様も本当にありがとうございました。

韓国で学んだことは日本に帰っても忘れず、今度は待っていている家族や友達にも伝えていけたらいいなと思います。韓国で出会った皆さんのおかげで、この一年がとても有意義な年になりました。留学期間も終わり、皆バラバラになってしまいましたが、彼らとは、いつまでも友達でお互いに学びあえる関係であることを願っています。



世宗大王の像の前で



学科の演劇公演の後に